

見えないユダヤ人

—半世紀後に読む『ロリータ』—

中 田 晶 子

半世紀前の邦訳受容

Vladimir Nabokov (1899–1977) の *Lolita* (1955/1958) が刊行されてから半世紀以上が過ぎた。日本で大久保康雄による翻訳が河出書房新社から出版されたのが1959年であるから、今年が50周年にあたる。この半世紀間の日本社会の変化を考えると、当時この小説が日本でどのように受けとられたかを想像することは難しい¹⁾。

当時の書評にはなかなか驚くべき発言が見られる。『ロリータ』の邦訳は上下二巻が2ヶ月の間をおいて出版されたが、上巻が出た段階での『週刊読書人』の書評で小島信夫は「男にとって、女の理想像は、十二歳の女にあることは、誰れでも知っている。これはむしろ精神的には非常に健康な感じ方であるはずだ。しかし常識的には不健康だということになるばかりか、この欲情をじっさいに満足させれば狂人ということにもなる」と書いている。すべての男性がHumbertであるかのような書きぶりだが、いわゆる「ロリコン」がありふれた欲望になってしまった現在の日本では、読書新聞という場であっても、作家がこのようなコメントを出すことはかえって難しくなったのではないだろうか。

奥野健男は、讀賣新聞の夕刊に掲載した書評で海外での発禁処分や激しい賛否両論の議論に触れた後「しかし上巻を読んだ限りでは、少女の美をあくなく追求するナイーブな小説である。昔から初潮期の少女を水揚げさせたり、また今日のように性道德の極度に混乱している日本では、西洋と違って何の抵抗もなく読まれるのではなかろうか」と書いている。「初潮

期の少女の水揚げ」という日本の性産業にあった伝統は、今日の感覚からすれば犯罪であり、おぞましい性的虐待以外の何物でもないだろう。それが全国紙夕刊の文化欄で当然のこのように語られていることにやはり驚く。売春禁止法が施行されたのが前年の1958年のことであるから、当時は少女買春も最近まで容認されてきた制度の内側にあったという事情が背景にあったことと思われる。一方で「性道德の極度の混乱」とあるのは、「太陽族」に代表されるような当時の若者の風俗を考えればいいだろうか。学生作家石原慎太郎の小説「太陽の季節」の出版は1955年、同年に芥川賞を受賞し、翌年に映画化された。小説と映画に描かれた太陽族の風俗は、今日の基準からすれば「極度の混乱」というには程遠いものに思われるが、戦前の男女別学教育や特に女性に求められた厳格な性道德と比較すればその判断も理解できよう。そうした既存の道德意識に対する反抗心から「太陽の季節」の若者達はことさらに刹那的、露悪的な姿勢をとっている。今となってはそれが逆に生真面目とも見えるが、裕福な家庭の育ちのよい若者達の奔放な性関係や暴力が当時非常事態と受け取られたことは容易に理解できる。

奥野の一文からは、性産業に従事していれば、初潮期の少女が性行為を強制されても問題ではないが、「堅気」の若い女性が自由奔放に性的な体験をすることは大問題という当時の価値観が読み取れる。以後、性産業と外部の世界の境界は曖昧になり続け、かつては厳然とあったはずの「堅気」「素人」と「商売」「玄人」の区別がつきにくくなった。現在「風俗」と呼ばれる性産業からは、半世紀前には残っていたであろう「苦界」や「淪落」のイメージが消えているし、インターネットの「出会い系」と呼ばれるサイトは、中学生から主婦まで幅広い年齢層の「普通の女たち」が報酬や娯楽を目的として不特定多数の男性と性関係を持つことを容易にした。「性道德の極度の混乱」という言葉はむしろ現在の状況に当てはまるように思えるが、いつの時代でも性道德は「史上例がないほど極度に乱れている」と感じられるものなのかもしれない。インターネットのサイトを利用して中学1年の女子生徒が援助交際を行うことはそれほど驚くべきことではな

いと感じる一方で、「少女の水揚げ」に平然と言及する書評には驚くという心理が、50年という時間の経過の産物なのであろう²⁾。

階級意識

読者の受容における違いということでさらに考えてみると、日米を問わず半世紀後の『ロリータ』読者に伝わりにくくなったことのひとつに階級意識があるだろう。郊外住宅地のミドルクラス出身のロリータがワーキングクラスの青年 Dick と結婚してデクラセした惨めさは、今の読者には当時より見え難くなっているのではないか。ほぼ30年前に翻訳でこの小説を読んだ学部生の私は、零落したヒロインをひどく哀れに感じた。現在の私は、ごく短い間であっても彼女がディックと幸せな家庭が持てたことを共に喜ぶ気持ちが強い。自分自身年をとったために、母親のような気持ちで、サヴァイヴァーである17歳の妊婦に健気さを感じているせいもあるだろう。しかし階級に対する意識は、一般には年齢が高くなるにつれて強くなる傾向にあることを考えると、この数十年間にわたる社会全体の階級意識の変化が、加齢に比例する保守化の傾向を上回って大きなものだったことになるだろうか。

女性と仕事

時代の変化を感じさせるものは他にもある。Ramsdale も Beardsley も上品な郊外住宅地の典型として描かれているが、そのような住宅地で暮らす専業主婦のフラストレーションから60年代の第二波フェミニズムが生まれるまでにはまだだいぶ間がある世界である。ラムズデイルの「上流階級」を形成する夫人連は当然のように専業主婦であり、通いや住み込みで働く黒人やアイルランド人の使用人に家事を任せ、あり余る時間を社交に費やしている（その排他的なサークルに Charlotte のレベルの住人は参加を許されない）。現在であれば、おそらく彼女たちの多くが博士号や MBA の

学位を持ち、高給を保証される専門職か社会的に意義を認められる NGO 等の仕事についていることだろう。しかしこの小説の世界では、まだ女性の社会的成功はその家庭や夫で測られている。斬新な女子教育を自慢するピアズレーの女性校長も、良妻賢母の育成を目指しているし、その方針に何の疑いも持っていない。

夫と死別したシングルマザーのシャーロットには、ハンバートが現れる前に近くの都会で働く計画があった。「心ではキャリアガール」(a career girl at heart 56)³⁾とは言うものの、本当にキャリア志向というわけではなく、収入と都会生活の刺激に加えてあわよくば再婚相手を見つけようとしたことであろう。予想に反して魅力的な下宿人ハンバートが登場すれば、都会に出て受付嬢になる必要は即座に消えてしまう。孤独な未亡人シャーロットは、真剣に愛を求めはしても、満足できるようなキャリアを求める気持ちはない。

ロリータは、映画女優に憧れていた。高校の演劇部にはいって劇作家 Quilty の愛人になり、ハリウッド映画に小さな役を得られそうところまでこぎつけるが、愛人の受け入れ難い性的要求を退けたため、その家から放り出され、映画の話もご破算となる。ロリータ自身に演技への情熱や才能があったとは言え、映画出演の話は、本人の才能や努力の成果というよりなりゆきの結果と見える。

現在もショウビジネスの世界を夢見る少女は無数にいる。小説の時代との違いは、現在であればロリータのような少女が憧れる仕事はそれ以外にもたくさんあるということだ。たとえばファッション、デザイン、広告、マスコミといったジャンルでの仕事やスポーツインストラクターなどが思い浮かぶが、小説では本人も周囲も考えつかないようだ。さらに、夫や父親のいる家庭の外で、自立した中年以降の女性が豊かに幸福に暮らしている例もこの小説にはほとんど登場しない。家出をして家庭の保護を失ったロリータには、「淪落」(怪しげな映画に出演する)か「零落」(ドライブインのウェイトレスから労働者の妻となって貧に耐える)の選択肢しかない。ほとんどの場合かなわぬ夢で終わる女優と圧倒的多数がおさまる家庭

の主婦の間に、現在なら女性の人生の選択肢は無数に見つかるはずだが、この小説の時代にはその両極のみが示されることがむしろ自然である。そのため、当時ロリータの「零落」は現在よりさらに悲劇的に見える効果を持っていたはずである。

人種（＝ユダヤ人）問題

人種による差別や人種間の階級の問題も当時と現在では見え方が変わっているもののひとつである。もともと日本人読者には「見えにくい」問題であるが、今では若い世代のアメリカ人読者にもこの小説に描かれていることの多くが気づきにくいことになってしまったかもしれない。東部の郊外住宅地ラムズデイルで望ましくない住人とされる「イタリア人の商売人」は、現在はまったく問題にされないだろうし、小説では同地の黒人が使用人の階級に限られていることも時代を感じさせる。現在であれば、シャーロットの隣家に黒人のミドルクラス一家が住んでいることは特に珍しくもなく、話題にもならないだろう。たとえ内心不愉快に思う旧弊な差別意識を持つ住人がいたとしても、自身の社会的地位や評判を危うくするリスクを考えれば、公には否定的な発言を控えるはずだ。なにしろ現在のアメリカはアフリカ系の大統領を頂いている国なのだから。一方この小説の時間では、Montgomery の Bus Boycott は 8 年後であり、公民権運動はまだ見えるものになっていない。

さらに興味深いのがユダヤ系の人々の扱いである。この小説の中で Jew あるいは Jewish という言葉が実際に使われることは一度もない。ところが事情を知らない人間には見えない、被差別階級としての「ユダヤ人」が何度も登場している。親イスラエルの国家となって久しい現在のアメリカからは想像しにくいことではあるが、1970 年に出版された Alfred Appel Jr. による註釈の初版でもすでにユダヤ人差別の問題が取り上げられているところを見ると、60～70 年代当時の若い読者にも既にわかりにくい主題であったことが窺える。

初めに「見えないユダヤ人」の主題がひそかに導入されるのは、ロリータのクラス名簿の中である。数名の生徒について、特徴や性格を簡単に述べている中で Irving Flashman という名前の男子生徒に対して、ハンバートは “Irving, for whom I am sorry” (53) とだけ書きつける。その理由は、アーヴィングがクラスで唯一のユダヤ人だからであり、ハンバートが迫害されている人間と自分を同一視しているのだとナボコフ自身が語ったと言う (Appel 363n)⁴⁾。ハンバートが自分以外の人間に同情を示すことは滅多にないことを考えると、この発言には意味深いものが感じられるし、当時のアメリカの読者にすら発言の意図がわからないことを予想しながらも、ナボコフが同情の理由を小説の中で明らかにしなかったことも気になってくる。

「見えないユダヤ人」は次に、シャーロットと結婚したハンバートに向かって隣人の John Farlow がイタリア人の多さについて不満を述べる場面に登場しかける。

“Of course, too many of the tradespeople here are Italians,” said John, “but on the other hand we are still spared—” “I wish,” interrupted Jean with a laugh, “Dolly and Rosaline were spending the summer together.” (79)

ジョンが言おうとしていたのは、「それでもまだここにはユダヤ人はいない」ということだった (Appel 372n)。Jean は夫の発言を遮って違う話題に移るが、これはハンバートの前でユダヤ人の話をするのがまずいと判断したことを示している。つまりジーンはハンバートがユダヤ系かもしれないと思っており、ジョンは思っていなかった、ということになる。若島正が指摘しているように、次章の終わりではジーンがクイルティについての話をしかけたところにジョンが現れ、話を遮ってしまうという対照的な構造になっている。ジーンが話し続けていれば早々とクイルティのアイデンティティが明らかになったところであり、そうすればハンバートの運命は変わったはずである (若島 577n)。ユダヤ人についての遮られた話は、ここでは遮られた内容よりも語りの構成上の役割が大きいと見えるが、ハン

バートに関わる「見えないユダヤ人」の主題を明確にしている重要な部分でもある。

ハンバートはコスモポリタンと呼ぶにふさわしい生まれと経歴の人間である。主としてフランス人とオーストリア人の血を引いているスイス国籍の父と、イギリス人の母との間にパリで生まれている。父はリヴィエラでリゾートホテルを経営しており、ハンバートはそこで幼少年期を過ごした後、ロンドンとパリで教育を受けている。アメリカ移住後はヨーロッパの教養人である自分を誇り、新世界アメリカの人々と文化を軽蔑している。一方、彼のプライドとは裏腹に小説のあちこちで彼は疑わしい目で見られている。少女愛の性癖を疑われることもあるが、多くの場合はそうではなく、ユダヤ人ではないかと疑われるのだ。

ハンバートを愛し熱烈に求婚したシャーロットも、愛人となってからでさえ、ハンバートがユダヤ人でないかと疑っている。

[. . .] good Charlotte interviewed me about my relations with God. I could have answered that on that score my mind was open; I said, instead—paying my tribute to a pious platitude—that I believed in a cosmic spirit. Looking down at her fingernails, she also asked me had I not in my family a certain strange strain. I countered by inquiring whether she would still want to marry me if my father's maternal grandfather had been, say, a Turk. She said it did not matter a bit; but that, if she ever found out I did not believe in Our Christian God, she would commit suicide. She said it so solemnly that it gave me the creeps. It was then I knew she was a woman of principle. (74-75)

シャーロットがハンバートを直視せずに「家系に奇妙な血筋がないか」と訊ねるのは、ユダヤ人の血が混じっていないか、ということである (Appel 371n)。ハンバートの曾祖父がトルコ人であっても何ら問題はないが、彼がキリスト教の神を信じていない、つまりユダヤ人であった場合は自殺する覚悟とまで言うのだ。9.11のテロ以降のアメリカでは、イスラム教徒が圧倒的に多いという理由からトルコ人のほうにむしろ違和感を感じるだろうと思うが、ともかく当時ユダヤ人との関係を忌避する気持ちは自殺を引き合いに出すほどに強かったわけである。そしてここでも「ユダヤ」とい

う言葉は語られず、シャーロットはハンバートから視線も逸らしている。おそらくこの場でハンバートはユダヤ系であることを否定したのだろう。そうでなければこの後二人が結婚することはなかったはずだ。しかし手記ではハンバートの返事は省略されてしまっている。ハンバートに対して「ユダヤ」という言葉が回避されるのと同様に、この小説の中でユダヤ系であることを自ら否定するハンバート自身の言葉は一度も聞かれない。

「非開放」ホテル

次はホテルのフロント係である。ロリータを伴ったハンバートがホテル Enchanted Hunters に遅れて着いたため、予約をキャンセルされたと告げられる場面がある。フロント係の老人が「礼儀正しく微笑みを浮かべて」ハンバートの「容貌を調べ、(名前が)間違っている (ハンバートが打った) 予約の電報をのろのろと取り出し、暗い疑惑と格闘した」後に断りを言うのだ。

There a bald porcine old man [. . .] examined my features with a polite smile, then leisurely produced my (garbled) telegram, wrestled with some dark doubts, turned his head to look at the clock, and finally said he was very sorry, he had held the room with the twin beds till half past six, and now it was gone. “The name,” I said coldly, “is not Humberg and not Humbug, but Herbert, I mean Humbert, and any room will do, just put in a cot for my little daughter. She is ten and very tired.”

The pink old fellow peered good-naturedly at Lo—still squatting, listening in profile, lips parted, to what the dog’s mistress, an ancient lady swathed in violet veils, was telling her from the depths of a cretonne easy chair.

Whatever doubts the obscene fellow had, they were dispelled by that blossom-like vision. He said, he might still have a room, had one, in fact—with a double bed. (118)

ハンバートが自分の名前は「ハンバーグでもハンバグでもなく、ハーバート、いえハンバートです」と名乗ると、老人はしゃがみこんで小犬と遊ぶ無邪気なロリータを確認し、ようやく宿泊を認めてくれる。ハンバートが打っておいた予約電報では名前の最後の文字が g に変わって Humberg と

なっていた。「暗い疑惑」とはユダヤ系のように聞こえるこの名前から生じた、この客がユダヤ系ではないかという疑いであり (Appel 377n), 運悪くハンバートの浅黒い男性的な顔立ちはその疑いを払拭する役に立たない。ハンバートはロリータの年齢を実際より少なく言いさえして少女愛の疑惑を逸らそうともするのだが、フロント系の疑いはそちらにはなく、宿泊を許可されたのは、ロリータの容貌にユダヤ系の特徴とされるものが見出せなかったためではないか。

電報に使われた名前 Humberg は、ハンバートが宿の予約にあたって事前に考えた偽名の候補のひとつであり、他の候補 Homberg, Homburg (109) やフロントで言い間違えた Herbert, さらに数年後に同ホテルからの手紙の宛名として使われた Hamburg (261) と共に、アシュケナージ (中部および東部ヨーロッパのユダヤ人) の可能性を持つ姓である。ハンバートという姓のみが、ドイツ, オランダ, フランスに由来する名前であり、他の姓と似かよった響きを持ちながらもユダヤ系の可能性を持たない姓である⁵⁾。

現在では考えにくいことだが、このホテルはユダヤ人を泊めない方針のホテルだったのである (Appel 435n)。「非開放」(restricted, 特定の民族を排除するの意) と呼ばれた、この種のホテルは当時珍しくなかった。反ユダヤ主義の問題をテーマとした Elia Kazan の映画 *Gentleman's Agreement* (1947, 邦題『紳士協定』) には、ユダヤ人を装った主人公が予約をしていた「非開放」のホテルで門前払いを受ける場面がある。この映画が公開された 1947 年は、上で引用したエンチャンティド・ハンターズの場面の年に設定されている⁶⁾。これは偶然なのだろうか。『紳士協定』は同年のアカデミー賞の作品賞、監督賞、助演女優賞を受賞した話題作であり、『ロリータ』を書いている時に、ナボコフがこの映画を意識したことは充分考えられる。『紳士協定』で主人公を断るホテルのマネジャーは、「ユダヤ人」の言葉を執拗に避けてあくまでも婉曲に「ユダヤ人は宿泊不可」の旨を主人公に伝える。そしてその後、「よろしければブルスター・ホテルに電話をしますが」(“If you'd like, I can call the Brewster Hotel.”) と申し出る。

「ブルースター」とは後にクイルティが人違いをしてハンバートを呼ぶ名前であり、その後その「ブルースター」には似ていないことを認めたクイルティはハンバートを難民のユダヤ人と決めつけることになる⁷⁾。

エンチャンティド・ハンターズの便箋に「近くに教会あり」と謳ってあるが、これは「キリスト教徒専用」（つまり「非開放」）の意味で用いられる慣用句だったという（Appel 435n）。フロントの老人は、ホテルが満室であることの原因として宗教団体とフラワーショウの会合が重なってしまったことをあげるが、「宗教団体」は明らかにキリスト教の団体を指し、暗黙のうちにユダヤ系の宿泊希望者を牽制している。

エンチャンティド・ハンターズを出てから、ロリータを連れて泊まり歩いた期間のホテルの人々も同様に、ハンバートに疑心を抱く。本当の父娘であることを疑われている場合もあったのだろうが、ユダヤ人か否かはさらに大きな問題であったらしい。第二部の冒頭でハンバートが思い出して憤慨するのが、彼の言葉の訛りを気にしたために母や妻の旧姓まで知りがった「高級リゾート」を自称したホテルである。

On the other hand, I shudder when recalling that *soi-disant* 'high-class' resort in a Midwestern state, which advertised 'raid-the-icebox' midnight snacks and, intrigued by my accent, wanted to know my dead wife's and dead mother's maiden names. (147)

母や妻の旧姓を尋ねた意図は、家柄への興味にはなく、また外国人全体の排斥にもなく、ユダヤ人かどうかを確認したいということである。

これらの場面の中で「ユダヤ」という言葉が決して使われないのは、それだけタブー感が強かったからだろうし、また暗黙のうちに皆の了解事項、つまり「紳士協定」になっていた、ということでもあるだろう。ハンバートが高級ホテルを避けて質素なモーテルを利用した理由は、費用の面での利点の他に、ユダヤ人差別のトラブルを避ける意図もあったに違いない。

Eva Rosen, a little displaced person

「言葉の訛りを気にする」ことから浮かび上がってくるものは、何だろうか。アメリカで生まれ育ったユダヤ人も多いはずで、外国語訛りが必ずしもユダヤ人に結びつくわけではない。しかもハンバートの英語はフランス語訛りであり、そこに亡くなった母親の第一言語であったイギリス英語のアクセントが加わっていた可能性もあるが、どちらにしてもアッシュケナーズの出自と直接には結びつかないはずである。しかしこの時期のアメリカには、フランス語訛りも含めて、様々な異なる外国語訛りのユダヤ人の移住者が激増していた。時代背景を考えるにあたり、ピアズレーで一時期ロリータの仲良しだった Eva Rosen の存在がヒントになる。

Eva Rosen, a displaced little person from France, was on the other hand a good example of a not strikingly beautiful child revealing to the perspicacious amateur some of the basic elements of nymphet charm, [...] I spoke French to her (much to Lo's disgust). The child's tonalities were still admirably pure, but for school words and play words she resorted to current American and then a slight Brooklyn accent would crop up in her speech, which was amusing in a little Parisian who went to a select New England school with phoney British aspirations. Unfortunately, despite "that French kid's uncle" being "a millionaire," Lo dropped Eva for some reason before I had had time to enjoy in my modest way her fragrant presence in the Humbert open house. (190)

エヴァは「子供の難民」(a displaced little person) と紹介される。現在「難民」という言葉には第三世界のイメージがあり、億万長者と噂される「アメリカのおじさん」を頼ってフランスからやってきたお洒落なパリっ子の白人の少女が「難民」と呼ばれることを不思議に思う読者が多いかもしれない。エヴァは、当時終わったばかりの戦争の犠牲者なのである。

この小説の時間には二つの世界大戦がすっぽりはいつているのだが、直接に戦争が出てくる部分はほとんどない。ヨーロッパ時代のハンバートは結婚してパリで暮らしているが、1939年にアメリカのおじが亡くなり、遺産を受け継ぐためにアメリカ移住を決意する。妻 Valeria はポーランド

人の亡命者で、当時祖国喪失者のために発行されていた Nansen Passport しか持っていないため、フランス出国の手続きに時間がかかる。これはロシアから亡命したナボコフ自身の体験でもあった。出国前にヴァレリアに去られたハンバートは戦火を避けてポルトガルで一冬を過ごした後アメリカにやって来る。ラムズデイルでの生活は終戦の翌々年であるのに、人々はまるで戦争などなかったかのように過ごしている。

小説の後半になってようやく読者は数名の傷痍軍人を見ることになる。Elphinstone でトラック運転手をしている陽気な大男の Frank は、海外の戦地で砲弾に吹き飛ばされたため、全身にモザイクのような傷を負っている。しかし彼の傷跡は数歩の距離まで近づかない限り気づかれず、左手の指が二本欠けていることも普段は手袋で隠されているのでわからない。ロリータの夫ディックは「遠い戦地」でおそらく爆音のために難聴になったのだろうし、その友人 Bill はイタリアで右腕を砲爆で吹き飛ばされている。大戦中は徴兵制が布かれていたわけだからミドルクラスの青年が戦傷を負うこともあったはずだが、なぜかそういう例はなく、被害にあった人々は皆ワーキングクラスに属している。そして小説内で唯一名前のある戦死者として、1952年にハンバートがラムズデイルを再訪した時、5年前にキャンプでロリータを誘惑した Charlie が朝鮮で戦死したことを告げられる。実際のところ、おせっかいな Chatfield 夫人がハンバートをつかまえてこの話をしなければ、この時に朝鮮戦争が戦われていたことは、現在の読者の意識には一度も上らずに終わるかもしれない。

エヴァの話に戻ると、「難民」displaced persons, 略して DPs は、今では英語圏の若い読者にも馴染みのない言葉になりつつあるらしいが⁸⁾、当時の意味では、ナチスによって迫害を受け、大戦後に戻るべき場所を失ったユダヤ系ヨーロッパ人のことだった。大戦中の忌まわしい体験のためにヨーロッパに残ることを恐れた彼らの大多数が、後にイスラエルとなるパレスチナへの移住を希望したが、アメリカを希望した者も多かった。Truman 大統領は、移民法による制限を緩和し、1952年までに約40万人のユダヤ系難民を受け入れた (*Memo to America v, Wyman 2*)。1945年12月

22 日に出された “President Truman’s Statement and Directive on Displaced Persons” の中では特に身寄りのない子供達に優先権を与えている⁹⁾。

Rosen という姓から小説内の薔薇のモチーフに連なるニンフェットのエヴァは、おそらくフランスで孤児となり、戦後早い段階でアメリカに逃れてきたユダヤ系難民児童の一人であると考えられる。彼女を引き取った「億万長者のアメリカのおじさん」は大戦前にアメリカに移住してビジネスで成功したユダヤ人の一人であるか、あるいはユダヤ人のステレオタイプとしてそのように噂されていた人物だろう。彼女の英語にブルックリン訛りが混じるのは、おじの英語の影響か、あるいは、彼女がアメリカに着いてからしばらくの間、当時ニューヨークにいくつかあった難民収容施設にいた時の名残りではないだろうか¹⁰⁾。ブルックリンは歴史的にユダヤ人居住者の多い地区である。

エヴァの登場はごく限られているのだが、重要な意味を持つ場面に現れる。ロリータの心を遅ればせながら理解しようとするハンバートが思い出す—そして読者も自分自身が同じようにロリータの心情を考えなかったことに衝撃を受ける—場面がある。

And I have still other smothered memories, now unfolding themselves into limbless monsters of pain. Once, in a sunset-ending street of Beardsley, she turned to little Eva Rosen (I was taking both nymphets to a concert and walking behind them so close as almost to touch them with my person), she turned to Eva, and so very serenely and seriously, in answer to something the other had said about its being better to die than hear Milton Pinski, some local schoolboy she knew, talk about music, my Lolita remarked:

“You know, what’s so dreadful about dying is that you are completely on your own”; and it struck me, as my automaton knees went up and down, that I simply did not know a thing about my darling’s mind and that quite possibly, behind the awful juvenile clichés, there was in her a garden and a twilight, and a palace gate-dim and adorable regions which happened to be lucidly and absolutely forbidden to me, in my polluted rags and miserable convulsions; [. . .] (284)

コンサート会場に向かって歩きながら、唐突に「死ぬのが怖いのは自分ひ

とりですることだから」とロリータがエヴァに言う。ハンバートは、自分には立ち入ることのできない純粹で美しい子供の精神世界をその言葉に感じたと切々と語る。しかしロリータがエヴァを選んで話した、その事実の意味は語られない。ここにいるのは二人の孤児、きわめて苛酷な体験をしている孤児である。エヴァは、アメリカに来る前に複数の肉親の死を経験したはずであり、ひょっとすると強制収容所や「輸送」でさらに多くの悲惨な死と隣り合わせだった可能性もある¹¹⁾。ロリータは12歳にして父母と弟をなくした孤児であり、性的虐待をくりかえす義父から保護してくれる者もない。傍目には牧歌的な東部の大学町で恵まれた思春期を過ごしている少女たちだが、抱えているものの深さは測り知れない。ロリータは、絵に描いたような幸福な家庭の子供である Avis には決してそのような思いを語ることはなかっただろう。

Humbert, a refugee

さて、ハンバートである。度重なる疑いに対して彼自身による明確な否定が一度もなされないことが気になるところだが、彼がユダヤ系である根拠は小説内に示されていない。その可能性はあるのだろうか。ハンバートは父を「人種の遺伝子のサラダのような人間」(a salad of racial genes 9)と紹介する。「人種」と「サラダ」の組み合わせは「人種のサラダボウル」と呼ばれるアメリカを当然連想させるが、「人種の遺伝子」という言い方に、出版当時であれば、ナチスの優生政策の響きが聞き取れたところだろう。そう考えると、父親の遺伝子の中にユダヤ人の遺伝子が含まれていた可能性は否定できないように感じられる。

一方ハンバートが父について書き加えた「その血管にはドナウの水が少量混じっている」(with a dash of the Danube in his veins 9)という表現から若島は、Johann Strauss II によるワルツ「美しき青きドナウ」*An der schönen blauen Donau* (1866)の曲を連想し、そこから「青い血」つまり貴族の血統を読み取っている (568n)。オーストリア貴族の末裔であれば、家系にユ

ダヤ人が混じっている確率は低いとも考えられるが、この場合は貴族の血は「少量」なので、家系に貴族も混じっていた、という程度であろう。やはりユダヤ系の可能性がないとは言えない。

また若島は、ジョン・ファーロウのユダヤ人に関する発言を妻が遮る箇所について、周囲の人間が主人公をユダヤ人ではないかと疑う設定が James Joyce の *Ulysses*(1922) と共通していることを指摘している(577n)。『ユリシーズ』の主人公 Leopold Bloom は血筋においても信仰においても純粋なユダヤ人ではなく、当人の意識の上でもユダヤ人としてのアイデンティティは堅固なものではない。しかし彼は客観的に見てユダヤ系であるし、そのために周囲から疑惑や敵意を向けられる。そうした周囲の人間の対応を引用することで、ナボコフが主人公の出自についても『ユリシーズ』との類似を暗示しているとまで解釈を広げるなら、ハンバートもユダヤ系であるというヒントがそこに隠されていることになる。こうした複数の可能性を持ちながら、結局のところ断定し切れない曖昧さがハンバートにはつきまとっている。

少なくとも、ハンバートはナチスの迫害によって国を追われた DP ではない。アメリカ移住もおじの遺産を相続する条件を満たすための自発的な行為だった。アメリカを「希望の地」として移住したわけでもなく、本心ではアメリカに属したいとも思っていない。その彼が小説のあちこちでユダヤ系難民ではないかと疑いの目を向けられわけだが、奇妙なことに、そうした事情を充分知りながら、ハンバートはユダヤ系であることを否定しないし、空想の中で自分を DP と呼ばせさえする。ロリータが送られたキャンプ近くに女装してテントを張ったら、ニンフェットたちが仲間に入れてくれるのではないかと妄想するのだ。

Should I disguise myself as a somber old-fashioned girl, gawky Mlle Humbert, and put up my tent on the outskirts of Camp Q, in the hope that its russet nymphets would clamor: "Let us adopt that deep-voiced D. P.," and drag the sad, shyly smiling Berthe *au Grand Pied* to their rustic hearth. (66)

ここでのハンバートはよからぬ空想を楽しんでいるだけだが、女装したハンバートが演じるのは、家もなくテント住まいのDP、悲しげにもじもじする「大足ベルト」である。ハンバートは少女たちに受け入れられたいと切望するが、想像上の「ベルト」もまた別の理由から切実に仲間を欲していたはずだ。

空想の中だけではない。現実でも彼はユダヤ系に聞こえる偽名を故意に使っているのではないかと思われるふしがある。ロリータが失踪した後、エンチャントド・ハンターズ再訪を計画して予約依頼の葉書を出したハンバートは、「バスルームのない地下の四人部屋以外満室」という見え透いた拒絶の手紙を受け取ることになる。“To a post card requesting twin beds Professor Hamburg got a prompt expression of regret in reply. They were full up. They had one bathless basement room with four beds which they thought I would not want” (261). バスルームも窓もなく、四台のベッドが並ぶ地下室はグロテスクであり、客室よりもむしろ収容所や死体安置所を連想させる。ユダヤ系を思わせる Hamburg 教授の予約に対し、ホテル側は慇懃な態度で恫喝しているかのようなのである。

「非開放」のホテルの予約に際して、二度ともユダヤ系の偽名が出てくるのはなぜだろうか。一度目の予約時にハンバートのうった電報の名前は Humbert となっていた。ハンバート自身はこう説明している。「結局そのままになったその奇妙な間違い—名前の最後の g—は私自身の躊躇の数々を伝えるテレパシー性の木霊であったかもしれない」(The droll mistake—the “g” at the end—which eventually came through may have been a telepathic echo of these hesitations of mine. 109) Humbert の t を g としてしまったのは電報局員の間違いらしいが、ハンバート自身がうっかり間違えて g のままにってしまったという意味に取れなくもない、曖昧な書き方がしてある。ハンバート自身の間違いだとすれば、ロリータと同じ部屋に泊まることに対して良心の恐れがあるため、ホテル側からの拒否を半ば期待していたために起きたものということになるだろう。では、二度目の Hamburg は、ホテル側の間違いか、ハンバートが故意にそう書いたのか。アベルは、ハ

ンバートが本名で予約をしたにもかかわらず、ホテル側が間違えてユダヤ系を思わせるハンバーグに読み違えて断って来た、と解釈し、ハンバートが始終名前を間違えられていることから、初めのケースでも電報局員が間違えたと考えている(435n)。しかし二度目の場合は、ハンバート自身が本名で正しく書いた葉書の名前をホテル側が三箇所間違える可能性は低いのではないか。おそらくハンバートは最初に予約をした時の電報にあった名前 Humberg を故意に使ったのではないだろうか。つまり、今回一人で宿泊するハンバートにはもはや何も躊躇する理由はないのだが、一度目に体験した躊躇も含めて自分の行為を再現したと解釈できる。そしてホテル側がよく知られたドイツの地名につられて二箇所母音を変えてしまったと考えられる。

間違いによって出てきた Hamburg という地名は、ナボコフの一歳下の弟 Sergey の死の記憶につながるものでもある。セルゲイは、同性愛と反ナチス的な言動を理由に強制収容所に送られ、ハンブルグ近くの収容所で病死している(Boyd, *American Years* 88)。彼はユダヤ人と運命を共にした非ユダヤ人の一人だった。この伝記的事実を考え合わせると、ホテル側の対応はあたかも、不気味な地下室に加えて、宛名にハンブルグの地名を重ねることで、ユダヤ人と信じた相手をさらに脅しにかかっているかのように見えてくるし、ハンバートの背後にナボコフ自身の姿が見えるように感じられもする。

ハンバートとユダヤ人のつながりはまだ終わらない。ハンバートは、殺害するためにクイルティに会いに行き、そこで彼に「ドイツの難民」(refugee) と決めつけられる。クイルティはハンバートの言葉の訛りに気づき、初めはフランス人ではないかと聞く。その後、オーストラリア人かドイツの難民と決めつけ、ここは(ユダヤ教徒にとっての)異教徒の家であるから、さっさと出て行くように命じる。“‘You are either Australian, or a German refugee. Must you talk to me? This is a Gentile’s house, you know. Maybe, you’d better run along [. . .]’”(297) ここでクイルティが使う refugee という言葉は、当時は DP と同じ意味で使われていた。それまでユダヤ人

の疑いをかけられた時と同様、ハンバートはここで DP 扱いを受けても何ら反論しない。自らの意思で渡米し、初めから仕事も財産も持っていたハンバートは、いかに定義を拡大しようと普通の意味では難民ではない。しかし彼はその少女愛のために周囲の世界から常に孤立し、少年時代の恋人アナベルを失った後は、真に愛し合う相手も家族も友人もない。彼が自ら属すべき世界と考えている古きよきヨーロッパは二度の大戦で失われ、彼には戻るべき場所がないし、アメリカ社会にも属していない。贅沢な難民ではあるが、やはりハンバートは本来属していた場所を追われた難民、a displaced person である。

小説の最後でハンバートはロリータと自分が共に永遠に生きることができる「芸術という避難所」について語り、手記を締めくくる。“I am thinking of aurochs and angels, the secret of durable pigments, prophetic sonnets, the refuge of art. And this is the only immortality you and I may share, my Lolita.”(309) ハンバートが自ら DP のユダヤ人とのつながりを作っていくように見えたその理由のひとつが、ここでようやく見出せるのではないか。「避難所」(refuge)という言葉は、作品内に存在する(あるいは想像上の)「難民たち」(refugees)とハンバートを結びつけ、さらにそこにナボコフ自身の姿をも照らし出す。ナボコフ自身はハンバートとは対照的に常に家族愛に満たされていたらしいが、革命で祖国を追われ、母語を離れ、ユダヤ系の妻と子と共にナチスの迫害をぎりぎりのところで逃れ、弟を強制収容所で失い、ほとんど難民に等しいとも言える体験をしている。芸術の創造者としてのレベルは異なるが、芸術という避難所を作り上げることを切実に必要とする「難民」の存在であることによって、ハンバートとナボコフが最後に重なることになる。

見えない理由

ナボコフ家はユダヤ系ではないが¹²⁾、ナボコフの父親 V. D. Nabokov (1870-1922) は、特に反ユダヤ主義が高まっていた革命前のロシアにあっ

て、ユダヤ人擁護に努めたりベラルな政治家だった (Appel 435n; Boyd, *Russian Years* 27, 55, 104, 521; *Speak, Memory* 176)。ナボコフ自身も青年時代から反ユダヤ主義を憎んでいたし、高校時代の親友の二人はユダヤ人だった (SM 180-88)。既に述べたとおり妻はユダヤ系の女性であったし、その人脈もあってヨーロッパでもアメリカでもユダヤ系の友人、知己が多く (Shrayer 74)、晩年は、かつてアメリカ移住やアメリカでの生活を援助してくれたロシア系ユダヤ人の複数の協会に寄付してもいた (Boyd, *AY* 582-83)。伝記にはアメリカ時代に大学の教授や学生、大学町の人々の反ユダヤ主義的言動に憤る姿がくり返し描かれている (Boyd, *AY* 22, 107, 311; Field 302-03)。ナボコフはまた作品の中でも反ユダヤ主義を批判的にくり返し描いている。しかし作品内で描かれる反ユダヤ主義者の登場人物やユダヤ系の登場人物は、ハンバートに比較すると「見える」存在として語られており、彼のように奇妙なねじれを伴っている例は他には見当たらないように思われる。

半世紀後の読者に見え難くなった部分が多いが、小説が出版された時点でのアメリカの読者にも「見えないユダヤ人」のテーマのすべてが見えていたとは限らない。その見え難さの一部が『ロリータ』という小説の中心部分に関わるものだからだ。一度気づいてみれば確かに語られており、もう見ずにいることはできないのに、それまでは見えにくかった重要な何かを発見するという行為が、ナボコフ作品、とりわけ『ロリータ』を読む体験の中心にある。ナボコフ自身が同種の体験を “Find What the Sailor Has Hidden” というゲームに見立てて自伝の最後で語っているように¹³⁾、再読、再々読によってようやくある程度意味を成してくる作品はナボコフには珍しくない。『ロリータ』の場合は、隠れているもの見えにくさが群を抜いており、彼の作品中でも独特な、奇妙な小説になっている。別の言い方をすると、隠れているものに気づかなくとも平気で読んでいられる小説なのだ。饒舌なハンバートの語りの文体は凝ったものではあっても、文章を追って表面の物語をたどるにさほどの苦労はないと感じられる。そのレベルでの受容に終わっても充分楽しめる小説なのである。たとえば *Ada*

(1969)と比較するとその違いが明瞭になるだろう。『アーダ』は表面の物語をたどる作業にもかなりの困難が伴う小説であり、途中で諦めてしまう読者の数は『ロリータ』とは比較にならないほど多いに違いない。しかし一見平易に見える『ロリータ』にしても、その最上層の物語からして平坦になめらかなわけではなく、突起や隠し扉が無数に存在する。「見えないユダヤ人」も隠し扉から小説の奥に続くテーマのひとつであろうと思われる。これまで小論で述べてきたことはそのごく一部に過ぎないのかもしれない、この先に隠された扉や通路がいくつも見つかるかもしれない。

- * 小論は、2009年9月6日発行の *Apied* 15号 29-31頁に掲載された「見えないユダヤ人」に大幅に加筆したものである。

註

- 1) 当時の『ロリータ』受容については、井上健によるシンポジウムの報告『『ロリータ』日本上陸：自我と身体を読まれ方』（日本ナボコフ協会 2003年大会におけるシンポジウム「作家と自我・身体表象」、東京水産大学、2003年6月7日）がある。当時の文学状況や文壇の問題意識、伝統的な自然としての「母性」の崩壊に絡めての考察は、短いながら内容の深いものである。
- 2) ナボコフと同年の生まれである川端康成は『ロリータ』の邦訳の出た1959年に「眠れる美女」を発表する。少女愛とネクロフィリアをテーマとするこの短篇は、「不健全さ」において『ロリータ』を上回るものではあっても、薬物で眠らされている若い女と老人の同衾が許される隠れ家的な空間は、伝統的な性産業の一部として受容され得るものである。作品の舞台が「特殊な場所」であって、郊外住宅地の「隣の家」ではないという点においては、まだしも読者に受け入れやすい設定であると言える。『ロリータ』においても、主人公は深い寝を目的として睡眠薬を少女に飲ませるし、ネクロフィリア的な願望を思い描く場面もあるものの、『ロリータ』と「眠れる美女」には、その意味でかなりの距離があると言える。
- 3) *Lolita* からの引用の頁は、1992年版による。
- 4) アベルの註からの引用の頁は、1992年版による。
- 5) 姓の由来については、FAMILY NAME HISTORY, *nameLAB* によった。
- 6) やはりユダヤ人差別をテーマにした Edward Dmytryk 監督の映画 *Crossfire*（邦題『十字砲火』）も同年に公開されている。この映画は、原作の同性愛憎悪による

殺人を反ユダヤ主義に置き換えている (Katz 389)。当時はハリウッドが社会派の映画をさかんに製作していた時期であるが、ユダヤ人差別が深刻な社会問題のひとつであり、かつ同性愛問題よりは取り上げやすい問題であったことがうかがえる。ドミトリクはこの年に「赤狩り」の対象である Hollywood Ten の一人とされ、映画界から一時追放された (Ibid)。1952年にはカザンも非米活動委員会に召喚された (Katz 754)。そこでの「転向」とその行為に対する自身の弁明が晩年まで問題にされたことはよく知られている。

- 7) Brewster はユダヤ系の姓ではなく、一般にはこの名前から Mayflower 号でアメリカに移住したピューリタンのリーダー William Brewster (1567-1644) を連想するのが自然なところであろう。
- 8) 河野哲子氏にご教示をいただいた。DP は多くの言葉を表す略語であるが、一般の若い年代の読者であれば、data processing, dual processors, dynamic programming といったテクノロジー関連の用語を思い浮かべるかもしれない。
- 9) “Visas should be distributed fairly among persons of all faiths, creeds and nationalities. I desire that special attention be devoted to orphaned children to whom it is hoped the majority of visas will be issued.” *Jewish Virtual Library* による。
- 10) DP をアメリカに受け入れたプロジェクトの全貌については、アメリカ政府が 360 頁にわたってまとめた詳細な報告がある (*Memo to America*)。DP の子供達については Althoff, Wylie, および Wyman の第 4 章 “Displaced Children” (86-105) を、DPs のアメリカ移住に関しては特に Wyman の第 8 章 “The Gates Open” (178-204) を参考にした。アメリカ人のケースワーカー Becky Althoff が第二次大戦後東欧の難民収容所で実施した調査の報告には、入所している思春期の少年少女の典型例が紹介されているが、そこに描かれた少女像は、容姿も性格もエヴァとはまったく異なっている。異様なまでに太り、動作や反応が鈍く、怯えやすく、身なりに無頓着である。精神的には鬱状態であり、身体的不調の訴えも多い (19-20)。このような少女に比べると、比較的短期間のうちに人間らしい生活に戻ることができたエヴァは、DP の少女としては非常に幸運だったと思わざるを得ない。戦後の難民収容所での DPs の状況については、他に Bernstein, Frank, Friedman, Srole を参照した。
- 11) Susan Mizruchi は、ロリータの友人の中で唯一ハンパートがニンフェットであると認めたエヴァをロリータの分身ととらえ、エヴァも保護者のおじから性的虐待を受けていた可能性があるとしている。ロリータがエヴァとつき合わなくなった理由は、二人の境遇が似すぎていたことからくる気まずさにあったという (635-37)。もっともミズルチはインセストを過剰に読み込む傾向があるようで、同じ論文でエイヴィスが父親の首に腕を回す動作にも近親相姦の可能性を読み取っている (643)。少なくともこちらは深読み過ぎると思われる。

- 12) Shrayer によればナボコフの曾祖父がキリスト教に改宗したユダヤ人であった事実が Svetlana Malysheva により 1997 年に発見されたと言う (90n)。Malysheva の文献 “Praded Nabokova, pochetnyi chlen Kazanskogo universiteta,” *Ekho vekov* (Kazan), 1/2 (1997): 131–35 は未見。
- 13) 自伝はナボコフ一家をアメリカに運んで行く客船が港に向かって歩いて行く一家の前に突然堂々たる姿を現すという情景で終わる。“There, in front of us, where a broken row of houses stood between us and the harbor, [. . .] it was most satisfying to make out among the jumbled angles of roofs and walls, a splendid ship’s funnel, showing from behind the clothesline as something in a scrambled picture—Find What the Sailor Has Hidden—that the finder cannot unsee once it has been seen.” (SM 310) 自伝の最終章は、それまで自伝の中で展開されてきたいくつもの主題が最終的に見事に収斂する場になっており、同時に読者が隠されていた主題に気づいて逆に自伝をたどり始める契機ともなっている。

引証文献

- Appel, Jr., Alfred. Notes. *The Annotated Lolita*. By Vladimir Nabokov. 1992. 321–441.
- Althoff, Becky. “Observations on the Psychology of Children in a D. P. Camp.” *Journal of Social Casework* 29 (January 1948): 17–22.
- Bernstein, David. “Europe’s Jews: Summer, 1947.” *Commentary* 4.2 (August 1947): 101–109.
- Boyd, Brian. *Vladimir Nabokov: The American Years*. Princeton: Princeton UP, 1991.
- . *Vladimir Nabokov: The Russian Years*. Princeton: Princeton UP, 1990.
- FAMILY NAME HISTORY, nameLAB. <http://genealogy.familyeducation.com/family-names> [2009年9月14日閲覧]
- Field, Andrew. *VN: The Life and Art of Vladimir Nabokov*. New York: Crown Publishers, 1986.
- Frank, Gerold. “The Tragedy of the DP’s.” *New Republic* 114.13 (1 April 1946): 436–38.
- Friedman, Paul. “Can Freedom Be Taught?” *Journal of Social Casework* 29.7 (July 1948): 247–55.
- Gentleman’s Agreement*. Dir. Elia Kazan. Based on a novel by Laura Z. Hobson. Screenplay by Moss Hart. Perf. Gregory Peck, Dorothy McGuire, John Garfield. Twentieth Century Fox. 1947.
- 井上健. 「『ロリータ』日本上陸：自我と身体を読まれ方」 *KRUG* V. 1 (Fall 2003): 8–10.
- 石原慎太郎. 「太陽の季節」『化石の森・太陽の季節』新潮社現代文学第 53 巻. 東

- 京：新潮社，1981年。334-366頁。
- Katz, Ephraim. Ed. *The Film Encyclopedia*. 5th Ed. New York: HarperCollins, 2005.
- 川端康成。「眠れる美女」『川端康成全集』第11巻。東京：新潮社，1969年。233-321頁。
- 小島信夫。「四十男の告白小説 — 一人のニンフェットへの欲情」『週刊読書人』1959年3月2日。
- Memo to America: The DP Story—The Final Report of the United States Displaced Persons Commission*. Washington: United States Government Printing Office, 1952.
- Mizruchi, Susan L. “*Lolita* in History.” *American Literature* 75: 3 (2003): 629-52.
- Nabokov, Vladimir. *Ada*. New York: Vintage International, 1990.
- _____. *The Annotated Lolita*. Ed, Introd and Notes. Alfred Appel, Jr. New York: McGraw-Hill, 1970.
- _____. *The Annotated Lolita*. Ed, Introd and Notes. Alfred Appel, Jr. New York; Vintage, 1992.
- _____. 『ロリータ』上・下 大久保康雄訳 東京：河出書房新社，1959年。
- _____. 『ロリータ』若島正訳 新潮文庫 東京：新潮社，2006年。
- _____. *Speak, Memory*. New York: Vintage, 1989.
- 奥野健男。「背徳は言い過ぎ」『夕刊讀賣新聞』1959年2月25日。
- “President Truman’s Statement and Directive on Displaced Persons.” *Jewish Virtual Library*.
http://www.jewishvirtuallibrary.org/jsource/Holocaust/truman_on_dps.html. [2009年9月14日閲覧]
- Shrayer, Maxim D. “Jewish Questions in Nabokov’s Art and Life.” Ed. Julian W. Connolly. *Nabokov and His Fiction: New Perspective*. Cambridge: Cambridge UP, 1999. 73-91.
- Srole, Leo. “Why the DPs Can’t Wait.” *Commentary* 3.1 (January 1947): 13-21.
- Wyman, Mark. *DPs: Europe’s Displaced Persons, 1945-1951*. Ithaca, NY: Cornell UP, 1989.